



2016年11月16日

千曲市市長 岡田 昭雄 殿
千曲市議会議長 和田 重昭 殿
千曲市教育委員会教育長 吉川 弘義 殿
千曲市文化財保護審議会会長 井原 今朝男 殿

一般社団法人 日本建築学会北陸支部
支部長 白山



旧更埴市庁舎の保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますます御清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、千曲市ホームページに掲載された「千曲市新庁舎建設基本構想」によりますと、現在進められている新庁舎建設に伴い、旧更埴市庁舎について、その存続・廃止を含め、今後の利活用が課題となっている由、うかがっております。

近年、戦後の近代建築へ評価は高まっており、本年7月には、東京・上野の国立西洋美術館を含む「ル・コルビュジエの建築作品―近代建築運動への顕著な貢献―」について、第40回世界遺産委員会が世界遺産一覧表へ記載を決定したこと、ご高承のことと存じます。

旧更埴市庁舎は、ル・コルビュジエに師事した建築家・吉阪隆正主宰のU研究室によって設計された建築であり、1964（昭和39）年に現敷地を得て計画に着手され、1966（昭和41）年に竣工したものであります。

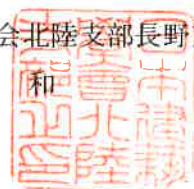
本建築は、ル・コルビュジエの流れを汲む近代建築の様式に地域的な特徴を加味した意匠によって、市民のシンボルとしての形を具現化した庁舎として偉観を誇ったもので、広く記憶されてきたものです。その建築の有する価値は別紙「見解」に記されたとおり、近代日本における歴史的建築としてまた景観上にも優れて価値の高いかけがえなきものであります。また近年ではこうした大規模な鉄筋コンクリート造建築は構造体の補強及び、機能に応じた整備によって長寿命化を図り活用してゆくことが、建築資源の有効活用の視点からも求められております。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、本建築の継続的活用に必要な耐震補強整備と合わせて、本建築の保存活用を図るための方途を積極的にご検討の上、貴庁舎の整備を一層意義深いものとして実現されますようお願い申し上げます。

なお、本会はこの建築の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

一般社団法人 日本建築学会北陸支部長野支所
支所長 土本俊



旧更埴市庁舎についての見解

1) 建物の概要

長野県千曲市大字杭瀬下 84 に所在する旧更埴市庁舎の建設事業は、1964（昭和 39）年 2 月開会の臨時市議会にて決せられ、設計はU研究室滝沢事務所、構造は早大松井研究室、設備は早大井上研究室が担当した。現敷地を得て、1965（昭和 40）年 1 月に起工され、1966（昭和 41）年 1 月に竣工したもので、工事は中信建設によって行われた。また 1 階東側階段室内の壁面彫刻は坂上政克によるものである。

竣工の記録は『更埴市制二十年誌』や建築専門誌（『新建築』、『建築文化』、『建築』）の1966年3月号に詳しく報じられており、そうした記録をもとにここに記す。本建築は敷地面積7392㎡を有し、建物の規模は、地下1階地上4階塔屋2階建、東西57.7m、南北16m、延床面積3820㎡である。建物は、善光寺平の盆地の軸線を意識して配置され、構造はボイドスラブ構法による鉄筋コンクリート造である。その他、スキップフロアシステム等が特徴として挙げられる。

本館竣工の後、別館が1967（昭和42）年に、北庁舎が1977（昭和52）年に、南庁舎が1989（平成1）年に、プレハブ棟が2001（平成13）年にそれぞれ竣工し、本館と北庁舎・南庁舎は、渡り廊下で接続される等、増築が重ねられている。しかしながら本館そのものは建築当初の意匠を良く留めるものであり、歴史的価値を有する現役の庁舎建築として知られている。

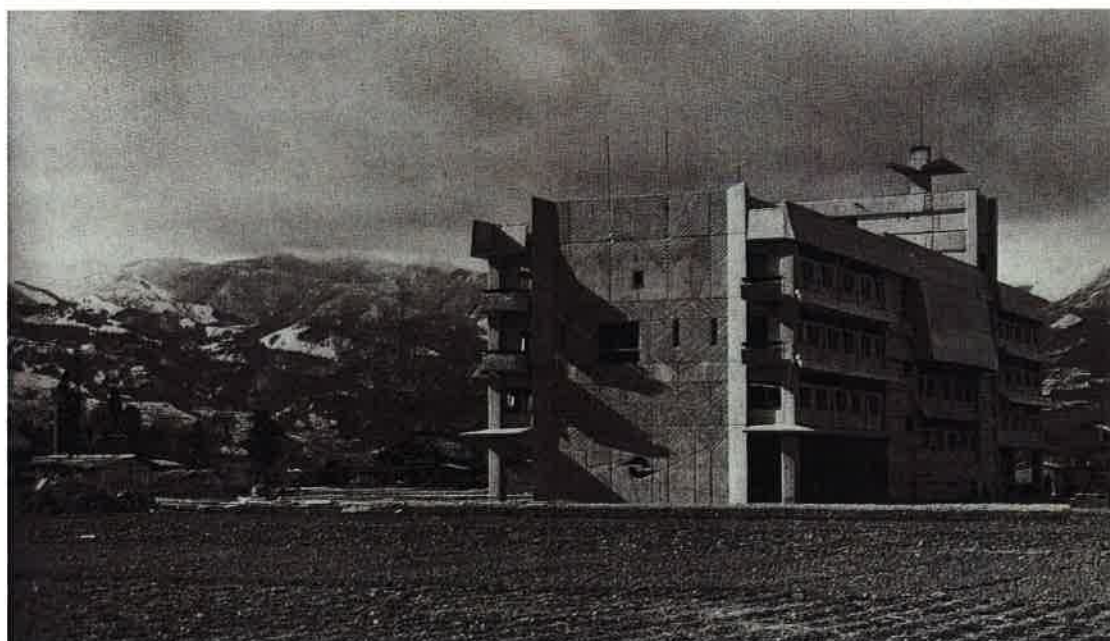


写真 1 竣工時の旧更埴市庁舎（『建築』1966年3月号より）

2) 歴史的価値

①建築意匠上の価値

建築の様式は、近代建築の巨匠ル・コルビュジエと考現学の今和次郎に学んだ建築家・吉阪隆正(1917-1980)による「不連続統一体」(多様性をもちながら、統一性を失わない)の思想に基づきながら、鉄筋コンクリート造の近代建築の表現の中に地域主義の要素を取り入れ構想されたものであり、市の特性を建物に表現しようとする意図が、市章をアレンジした外壁の意匠や建物側面の麦の穂模様(模様打ちコンクリート)などに窺える。

内部は、全体を構造的に三つのブロックに分け、結び目を階段室とする構成となっている。各階が半階ずつでつながるスキップフロアシステムが採用され、階高の自由な取り合いと流動性の高い空間が組み立てられている一方で、ボイドスラブ構法により、各ブロックでは15mの無柱空間が実現され、柱によってプランニングが規制されることのない、可変性を備えた空間となっている。個別の意匠において注目されるのは、東側の階段室の構成である。プレキャストコンクリートの段板を鉄筋でつり込む方法を用いており、トップライトのある吹き抜けの階段室において、鉄筋の線材が生み出す幾何学的な構成は、成形合板による曲面の手摺と相まって、特徴的な空間を演出している。また同階段室内最下部には、五代友厚像(鹿兒島市)等を制作した彫刻家・坂上政克(1915-1982)の壁面彫刻が設置されており、この空間にさらなる魅力を与えている。

この階段室の現状は、階段の側面や裏面に目隠し用のシートやスクリーンが付加され、また天井からつり下げられていた照明器具が撤去されており、オリジナルの状態の復元が望まれる。

②設計者に関する評価

U研究室は、早稲田大学の教員であった吉阪隆正が大学構内に設立した吉阪研究室を、1964(昭和39)年に改称したものであり、日本建築学会作品賞を受賞した「アテネ・フランセ」(1962年)をはじめ、日本の近代建築史上にのこる名作を多数生み出した設計事務所である。近年、U研究室の業績に対する評価は高まっており、「浦邸」(1956年)と「大学セミナー・ハウス」(1965年)が、DOCOMOMO Japanが選定する「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」に含まれている他、文化庁の国立近現代建築資料館には、約8500点の図面が収蔵されており、昨年12月には、『みんなでつくる方法—吉阪隆正+U研究室の建築』展が開催された。

吉阪隆正は、1941(昭和16)年に早稲田大学理工学部建築学科を卒業し、大学院修了の後、同校助手となった。1950(昭和25)年に渡仏、ル・コルビュジエのアトリエに勤務の後、1954(昭和29)年に吉阪研究室を設立して建築設計活動を開始した。多くの作品を手がけ、本建築工場の現場にも足を運んでいる。早稲田大学教授、早稲田大学理工学部長を歴任し、1973(昭和48)年には日本建築学会の会長に就任した他、登山家・探検家としても有名で、日本山岳会理事や早大アラスカ・マッキンリー遠征隊長を務めた。父・俊蔵は内務官僚、母・花子は動物学者として有名な箕作佳吉の次女であり、隆正は箕作阮甫の玄孫にあたる。

また本建築は、U研究室滝沢事務所(分室)の作品としても知られている。中心となった滝沢健児(1927-2013)は、長野県千曲市稲荷山出身の建築家であり、早稲田大学大学院修了後、吉阪研究室の創設メンバーとして1954(昭和29)年から1964(昭和39)年まで在籍した。「浦邸」、「ヴィラ・クウクウ」(1957年)、「富山市立呉羽中学校旧校舎」(1958年)、「大学セミナー・ハウス」等を担当しており、「みんなでつくる」ことを実践したU研究室の代表作に中核メンバーとして携わった功績は見逃せない。旧更埴市庁舎の他、旧更埴市体育館等

を設計しており、地域に根ざした建築への取り組みも評価される。さらに、1957年に早稲田大学講師となり、その後、国士舘大学で教授（後に名誉教授）を務めたほか、『図面と表現・建築』、『すまいの明暗』、『木とけとき』など多数の著書があり、教育活動への貢献も多大なものがある。

3) 期待される活用

竣工から約50年の月日が経過する中、西洋美術館が世界遺産に登録されたことを考えれば、本建築は、地域にとって同様の価値を持つものと考えられる。千曲市内の旧更埴市体育館の解体が進められている今、本建築が失われるようなことがあれば、地域や国の建築文化にとっても大きな損失である。イコモス（ICOMOS）による「マドリッド・ドキュメント」（2011年、20世紀建造物の保存に関するガイドライン）の採択にも見られるように、本建築のような鉄筋コンクリート造の建築物は、修復や改修、補強などを行い、用途の変更も含めて、活用し続けるのが、近年の世界的潮流となっている。今後も本建築が持つ歴史的、文化的価値を維持しながら、機能性や耐震性を高め、活用されることが望まれる。

以上のように、本建築は庁舎建築としての建築意匠上の価値、設計者に関する価値をもつことに加えて、本建築の位置する長野県千曲市は、冠着山や飯縄山に囲まれた善光寺平の南に位置し、2010（平成22）年に重要文化的景観に選定された姨捨の棚田や、2014（平成26）年に伝統的建造物群保存地区に選定された稲荷山等、歴史的記念性を有する北信の中核を形成している。そこでは近年、北陸新幹線が開通し、周辺において種々の建築工事が行われていることもあり、同地域の近代化の歴史を現在に伝える、本建築の景観的価値は一層重要なものとなっている。



写真2 現在の建物外観



写真3 現在の東側階